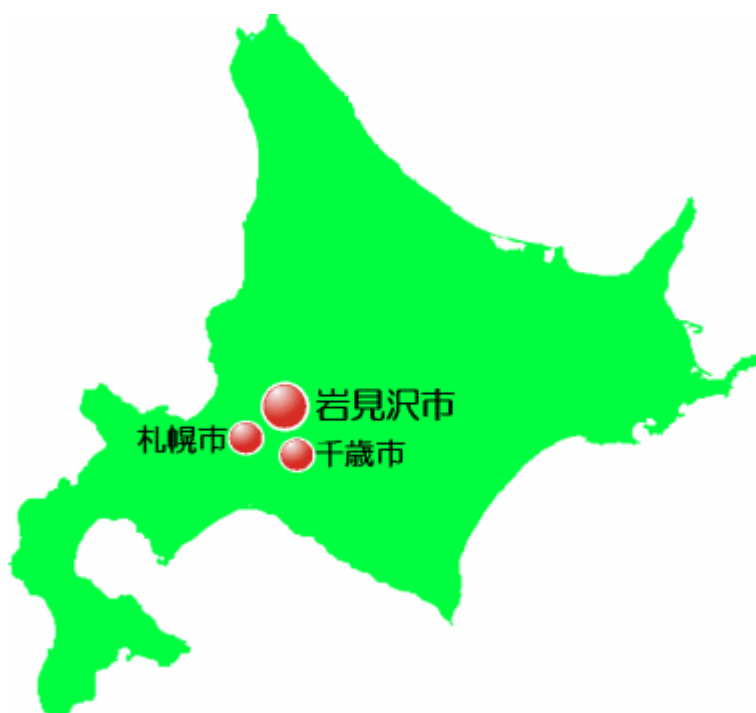


事例番号 008 歩いて暮らせるまちづくりと IT ビジネス特区(北海道岩見沢市)

1. 背景

岩見沢市が位置する石狩平野は米を中心とする穀倉地帯であることから、同市では農業が基幹産業として発展してきた。また、明治時代から昭和 40 年代まで、岩見沢市は交通の要衝として石炭の集散基地、輸送拠点としての役割を担った。隣接する夕張市には旧財閥系の石炭産業が進出してエネルギー基地を形成したことから、両市が一体となって繁栄を続けてきた。



岩見沢市の位置 (資料:岩見沢市ホームページ)

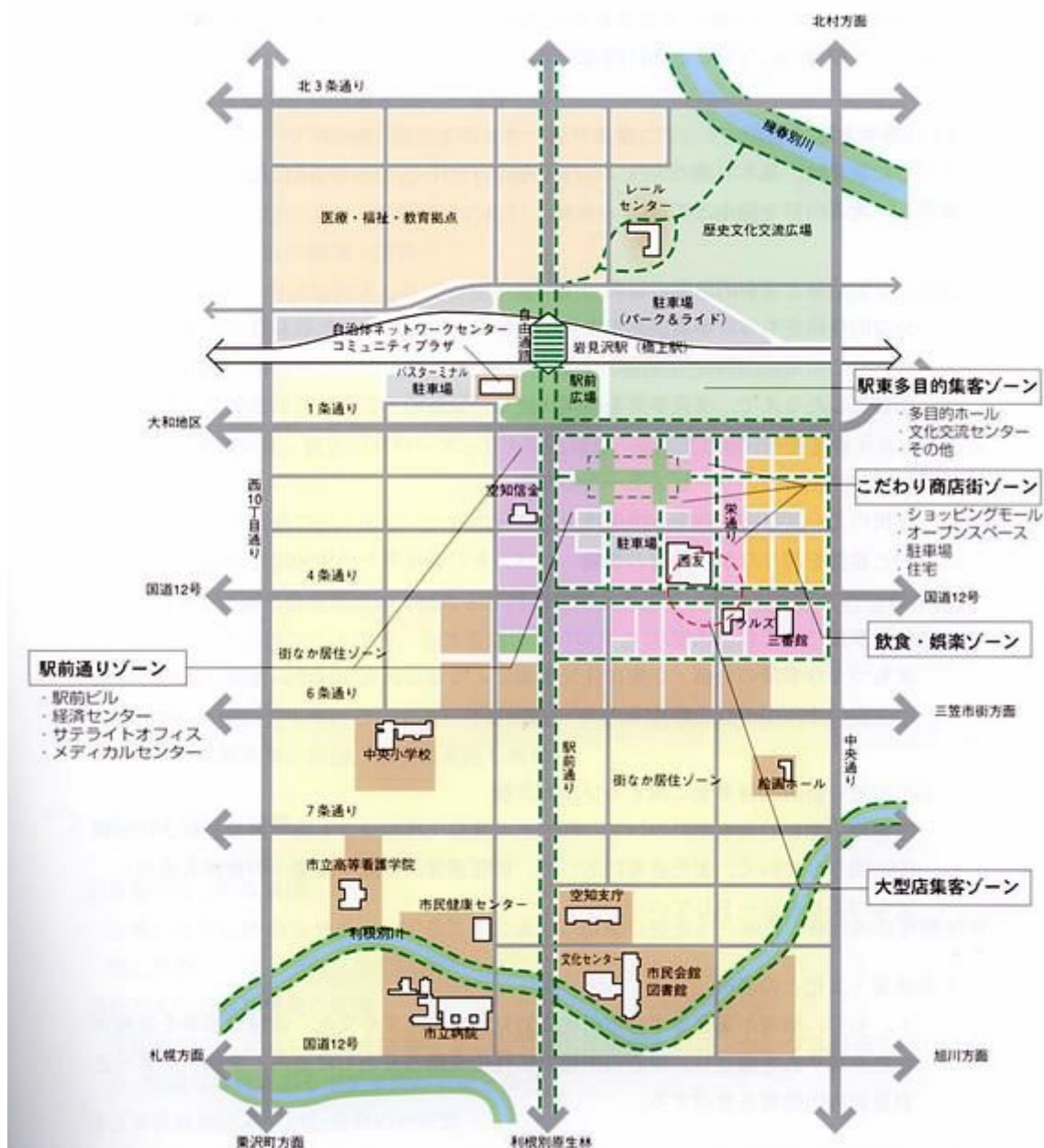
しかし、石炭産業は昭和 40 年代前半から衰退して炭鉱が相次いで閉山したことから、地域一帯の経済活動は大きく落ち込むこととなった。岩見沢市、夕張市、美唄市、三笠市、南幌町、由仁町、長沼町、栗山町、月形町から成る南空知地域の人口は 1960(昭和 35)年は 41 万 8 千人であったが、現在では 20 万人以下と半分以下に減少している。

そのような中であって、岩見沢市は、国及び北海道等の多くの行政機関や大学が集積し、行政・教育・商業等の様々な分野で空知圏の中心都市であったことから、1995(平成 7)年までは人口が増加していた。しかし、その後は減少傾向に転じている。それは、財政事情の悪化による公共予算の削減や公共事業依存型であった北海道経済の停滞により、岩見沢市の経済も大きく影響を受けているためであると考えられる。

岩見沢市では、特に中心市街地の衰退が顕著である。その主な原因は、周辺の炭鉱の閉山や農業従事者の減少などによる産業構造の変化(周辺人口の減少)、昭和 50 年代以降急速に進展した人口の郊外分散、昭和 60 年代以降にはじまった大型店の郊外進出などである。最近でも 2004(平成 16)年以降に郊外に 3 つの大型商業施設が進出している。

中心市街地の人口は2000(平成12)年国勢調査で5,181人(世帯数2,480戸)となり、ピーク時(昭和45年)の約4割程度にまで激減した。中心市街地の小売店舗数も1991(平成3)年373店、1994年303店、1997年298店と減少を続け、歩行者の通行量も大幅に減少して空洞化が顕著に進行した。

このような状況に対処するため、岩見沢市は1998(平成10)年に助役を本部長とする対策本部を設けて活性化策を検討し、1999(平成11)年7月に中心市街地活性化基本計画を策定した。そして商工会議所と協働しつつ中心市街地活性化のための諸施策を展開してきている。



岩見沢市の中心市街地 (資料:TMO 構想)

2. 目標

(1) 歩いて暮らせる街づくり

経済新生対策(1999年11月経済対策閣僚会議決定)において、岩見沢市の「歩いて暮らせる街づくり」構想がモデルプロジェクト実施地区として選定された。同構想では、岩見沢市の持つ恵まれた自然環境を生かして、街の中にも水や緑、さらに人々のふれあいが身近に感じられ、必要な都市機能が集約し活用される、利便性、効率性の高いコンパクトなまちづくりを進めることとした。コンパクトなまちづくりは、省資源・循環型社会の構築などにより地球環境に与える負荷を低減した持続可能なまちづくりのために必要であるが、また、豪雪地域にある岩見沢市の場合、冬期においても「歩いて暮らせる街づくり」を実現していくことが市民生活の質を高める上で必要になっており、移動手段としての自動車の利便性は無視できないものの、今後は自動車に依存しない生活環境を整えていくことが求められている。

(2) 岩見沢市ITビジネス特区

岩見沢市は、1997(平成9)年度に地域IT拠点として開設した「岩見沢市自治体ネットワークセンター」を中心に、市内全小中学校、公共施設、医療機関等を結ぶ自営光ファイバー網の整備を行った。また、暮らしなどに役立つ公共アプリケーションの開発・運用を推進してきた。そして、岩見沢市が他地域に先駆けて整備・運用を進めてきたこれらのIT基盤や先進的アプリケーションシステム等のノウハウを活用して民間ビジネスを積極的に展開するため、「ITビジネス特区」が設けられた。これは、優れたビジネス環境の創造による地域経済の活性化、住民生活の質的向上を目指すプロジェクトである。

3. 取り組みの体制

住民参加の街づくりに関して数多くの表彰歴があることからわかるように、岩見沢市は住民主体で街づくりに取り組んでいる。「歩いて暮らせる街づくり」に関しては、当プロジェクトの一環である「四条・栄通り地区整備」案、「駅前通りまちなみ形成」方針案の策定に当たり、ワークショップを通じた住民の合意形成の上に事業を推進している。「交流拠点(イベントホール、イベント広場)整備事業」においても、「まちづくりワークショップ」で作成した駅東地区におけるまちづくりの基本方針に沿って土地利用整備計画を策定し、事業を実施している。大型店撤退跡地の活用方法に関しても市の主催でフォーラムや市民ワークショップが積み重ねられ、それらから生まれた市民等の意見を元に事業が実現した。最近では、住民参加からさらに一歩踏み出して市民自らが「NPO 法人 薔薇香る癒しのまち岩見沢」を立ち上げ、まちづくりに貢献する活動を開始している。

一方、岩見沢市ITビジネス特区の認定に伴い、規制緩和特例措置の対象となった「5GHz 帯無線アクセスシステム」の導入と「自営光ファイバー網」の開放等により、地域内において優れたネットワークを構築し、ブロードバンド接続サービスをはじめ、高度IT基盤を活用したビジネス(サービス)の展開を図っている。また、2004(平成16)年3月に開設した「岩見沢市新産業支援センター」を中心にIT関連企業による新たな事業展開が進められている。

4. 具体策

(1) 歩いて暮らせる街づくり

自然と共生したコミュニティの再生を図るとともに市民生活の質を高めるため、ユニバーサルスタンダードの思想に沿いつつ、ボランティア、NPO などの市民協働による多様な活動により、「拠点」と「連携軸」とを形成するとともにそれらをネットワーク化し、面的な事業展開を図っている。

① 「拠点」、「連携軸」の形成とネットワーク化

1) 歩く市民の市民広場拠点<駅前広場、駅周辺地区>

駅を拠点にして公共施設を整備している。

(公共施設)

駅前広場(街路事業) 2003 年全面供用開始

地域交流センター(イベントホール、まちづくり総合支援事業)

市民広場(イベント広場、都市公園事業) センターとあわせ 2002 年オープン

自治体ネットワークセンター(コミュニティプラザ) 1997 年オープン

2) 市民生活のセーフティネットの拠点<健康・福祉・文化>

3) サステイナブルコミュニティの拠点<市民の森>

4) 次世代を担う人材育成拠点<教育大岩見沢校>

5) 豊かな自然とまちを結ぶ緑と情報ネットの連携軸の整備



市民広場、イベントホール「赤レンガ」(駅東多目的集客ゾーン)



自治体ネットワークセンター

② 街なかを歩きたくなる環境整備

岩見沢市では歩道の拡幅や電線類の地中化等が進められており、街なかを訪れた人誰もがつい歩いてみたくなるような環境整備が行われている。市道西4丁目線等の2路線(延長450m、490m)で歩道の拡幅(2.25m→3.5m)が実施され、あわせて歩道段差解消(縁石のフラット化)、歩道レンガ舗装、車止めの設置等が行われた。車止めは、路上駐車が歩行者にとっても危険であったことから、駐停車禁止として1.7mピッチで歩車道区別のために設置されたものである。また、照明等のデザインの統一、電線類の地中化等も実施されている。

自転車対策としては、自転車の走行環境の整備を進める一方、駅周辺に駐輪場(1,300～1,400台)の整備を予定している。

冬季の対策としては、岩見沢市が「除排雪対策本部」を設置して24時間体制で除排雪に取り組んでいる。また、「除排雪モデル事業」で冬でも除排雪の行き届いた歩きやすい環境を整備している。沿線商店街が電気使用料を負担してロードヒーティングを実施している路線もある。利根別川の消流雪用水を活用して地域住民の除排雪負担の軽減も図っている。冬期間におけるタウンモビリティ(電動スクーター)実験も行っており、これらの事業を徐々に拡充していくことで街の賑わいや活力が回復することが期待されている。

③ その他

駅前街区で再開発推進協議会が結成され、早期の事業着手を目指して商業施設、医療・福祉

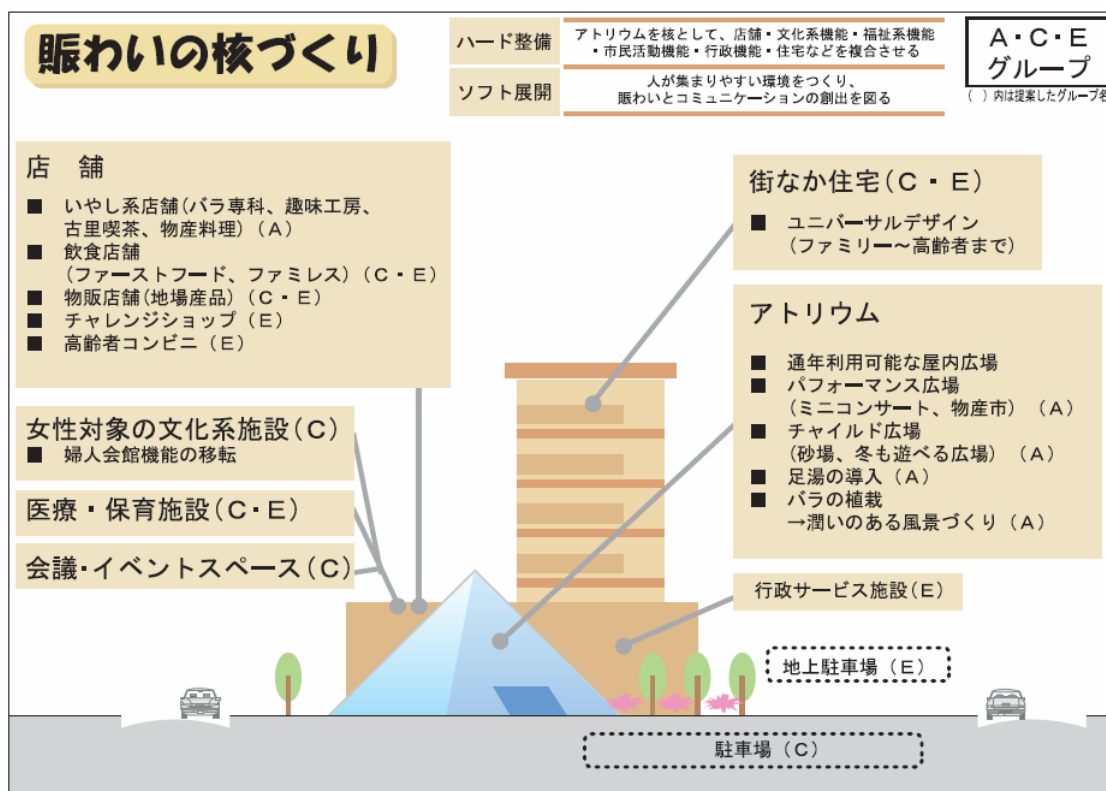
施設、住宅などを導入した再開発計画が検討されている。駅前街区の住宅整備をきっかけとして、街なか居住の整備が周辺へ波及していくことが期待される。また、岩見沢市では、コンパクトなまちづくりにあわせて公共施設の整備が進めてられている(前掲の駅前広場、イベントホール、駅東市民広場公園、自治体ネットワークセンターのほか、新産業支援センター、中央公園、市民会館(改築)、電柱地中化、ロードヒーティング等)。

(2) コミュニティ施設の整備(大型商業施設「ラルズ」跡地を活用した「ぷらっとパーク」)

中心部にあった商業施設ラルズ岩見沢店が 2001(平成 13)年に撤退したため、その跡地(約 3,400 m²)を市が買収した。その跡地利用計画を議論するため、2003 年に「やる気、本気宣言! 元気づくりフォーラム in いわみざわ」を開催し、続いてアンケート調査や市民参画のワークショップ(5 グループ、各 5 回、40 名参加)を積み重ねた(「自分たちのまちを自分達で創る実験の場として捉え」るというコンセプト)。この間、2003 年 11 月に岩見沢商工会議所が意見書を、2004 年 2 月に岩見沢市商店街振興組合連合会が意見書を提出し、その一方で岩見沢市が「まちづくり出前講座」を 2003 年 6 月から 2004 年 3 月まで 5 回開催して市民の意見を広く集め、それらを集約して 2004 年 5 月に市が「まちなか再生元気フォーラム」を開催して「駅周辺地区活性化計画(まちなか再生元気プラン)」としてまとめた(岩見沢市商工労政課商店街活性化推進係担当)。

「市民ワークショップ」でまとめられた提案のイメージ

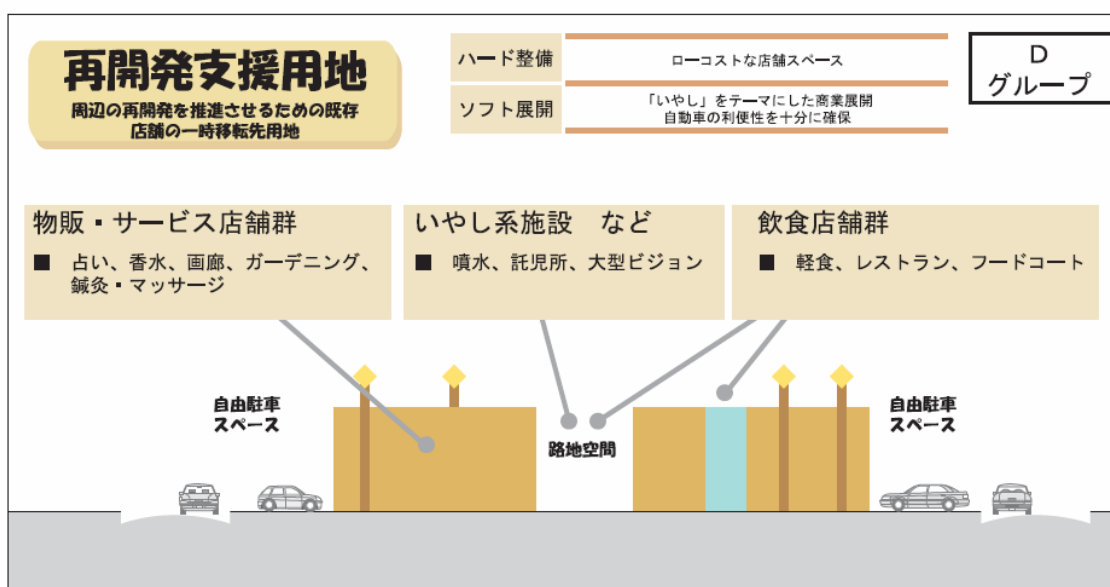
① 様々な機能が複合する賑わいの核づくり(導入機能はグループにより違いあり)



②5年程度は施設整備をせず自由広場として活用（その間に整備の方向性を固める）



③周辺の再開発を推進する既存店舗の一時移転先用地として活用



(出典) 岩見沢市「まちなか再生元気プラン」

2004年8月には市民提案等を活かしながら跡地の半分を活用する事業を市が募集し、2事業者が選ばれ、同年10月に事業計画が決定された。それに基づき、1933(昭和8)年に建てられて老朽化が進んでいた生鮮市場「ナカノタナ」から当施設に7軒を移転し、それに1軒の新規出店を加えた8軒で2005(平成17)年3月に鮮魚屋、肉屋、花屋などから成る「仲の店協同組合」の店舗営業を開始した(「新・食生活館 ナカノタナ市場」)。また、岩見沢市商店街振興組合連合会が無料休憩所を設置して同月オープンした(「お休み処」)。

事業の方式は、市の負担で敷地舗装、駐車場・トイレ等整備を行い、事業者が店舗建物部分の土地を期間限定(10年間)の事業用定期借地権として借り受けて建物を建設するというものであった。この施設は多くの市民が気軽に訪れてくれるようにとの願いを込めて「ぷらっとパーク」と命名され、週末にはイベントを開催して誘客を図っている。

<市の支援>

- ① 基盤部分の整備(整地、舗装、上下水、基礎、トイレ、電灯)
- ② イベント時の臨時駐車場として用地を無償貸与
- ③ イベント費用への補助(経済産業省の補助金制度「商店街等活性化事業」活用)



“ぷらっとパーク” (資料:岩見沢市)

(3) 「NPO 法人 薔薇香る癒しのまち岩見沢」の活動

住民参加からさらに一歩踏み出して市民自らが NPO を立ち上げ、まちづくりに貢献する活動が始まっている。2003 年 11 月の「元気づくりフォーラム in 岩見沢」に参加した人々がその後の市民ワークショップ中で「癒しと薔薇」が岩見沢の土地の意志であると確信するようになり、ワークショップ参加者有志が専門家の協力を得て「NPO 法人 薔薇香る癒しのまち岩見沢」を設立した(2004 年 10 月に NPO 法人として登記)。

同会は、薔薇と癒しをコンセプトに、豊かな心を育み、その心で当地を訪れる人の心を癒し、次世代に継承する「癒しの地」となる環境をつくることを目的として活動している。

「NPO 法人 薔薇香る癒しのまち岩見沢」の主な事業

- ・ 事務所兼店舗「カフェローズセラピー」の経営
所在地:岩見沢市 4 条西 4 丁目
セミナー会場や工房として利用可
癒し関連商品販売
- ・ 癒し関連事業
アロマセラピー、リフレクソロジー等、自己治癒力を高めるための商品研究・開発・販売
- ・ 薔薇関連事業
薔薇の品種改良、栽培、オイルやウォーターの抽出、薔薇関連商品の研究・開発・販売
- ・ 医療福祉事業
園芸療法の普及促進
- ・ 教育環境事業
学校ミニバラ園づくり、ビオトープづくり、学校の中の癒しの空間づくり
- ・ 食の安全事業
食育推進に関する活動
- ・ 地域再生事業
岩見沢オリジナル岩見沢ブランドの創出
空き店舗を利用して NPO 販売店としての店舗展開

これまでの主な活動

- 2004 年 9 月 「薔薇薫る癒しのまち岩見沢フォーラム」開催
(講演会、パネルディスカッション、定員 100 名)
- 2004 年 10 月 事務所オープン
- 2005 年 3 月 「花大陸フォーラム」開催
(講演会、トークセッション)
- 2005 年 4 月 いわみざわ公園バラ園に「cafe Rose Garden」オープン
- 2005 年 10 月 「カフェ&プリザーブドフラワー工房」オープン
- 2005 年 12 月 「Eri Wakebe さんのハッピーリース展」開催
- 2006 年 3 月 「コーチング初級セミナーIN 岩見沢」開催
「グラスアート案&プリザーブドフラワー体験講習」開催
「プリザーブドフラワーインスタント溶液講習」開催

同会は、2005 年に『北海道みち百選』で景観部門の賞を受賞した。『北海道みち百選』は、「北海道みちとくらしと未来のネットワーク委員会」(文化人・知識人の会)が「みち」にまつわる様々な活動をしている団体を選んで表彰するものであるが、「NPO 法人 薔薇香る癒しのまち岩見沢」の「市民でつなぐ全長 5km の薔薇街道」の活動が《「みち」にまつわる地域づくり》として評価された。これは、岩見沢駅前から「いわみざわ公園バラ園」までの全長 5km を市民がバラ園とする活動であった。

(4) IT 関連産業の育成

岩見沢市は IT の高度利活用による「市民生活の質的向上」、「地域産業経済の活性化」を目的とした各種 IT 施策を展開している。1997(平成 9)年、岩見沢市は他都市に先駆けて地域 IT 拠点施設として「自治体ネットワークセンター」を整備し、また、主要公共施設、医療施設等を結ぶ自営光ファイバー網を整備し、衛星通信機能や研究開発用ギガビットネットワーク(JGN)アクセス機能など高度な情報通信基盤の先行整備を実施している。また、2004(平成 16)年にはビジネスインキュベーション施設として「新産業支援センター」を開設した。既に関連企業が相次いで進出して事業活動を開始しているほか、遠隔医療など産学官連携による新しいビジネスモデルの開発、デジタルコンテンツ制作技術者の養成など、高度 IT 人材育成も積極的に進められている。

5. 特徴的手法

フォーラムやワークショップ等を通じて市民主体のまちづくりを広範に展開していることが何より大きな特徴である。また、行政が事業の基盤を整備し、民間事業者の起業を誘導するよう働き掛けていることも特徴的であり、その一つの例がラルズ跡地を活用した「ぷらっとパーク」事業である。

一方、石炭産業によって繁栄～衰退を経た岩見沢市は、早くから IT に着目し、他地域に先駆けて高度 IT 基盤の整備を推進してきた。その先進的な取組みをベースに、IT 関連の産業育成、人材育成、市民の生活の質の向上を図っている点も大きな特徴である。

6. 課題

「歩いて暮らせるまちづくり」は未だ緒に付いたばかりである。歩行空間の整備、各拠点での公共施設の整備、商業、業務、医療等の都市機能の再編成など、岩見沢市ではこれまで様々な施策を積極的に展開してきたが、今後中心部で定住人口を増やしてバランスのとれた都市形態を実現するためには、市民、事業者、行政等の引き続きの強力な連携が重要である。

また、IT 関連産業は非労働集約型の割合が高く、中心市街地への直接的な波及効果はまだ少ない。現在、民間コールセンターや IT 企業の進出が相次いでいるものの、今後さらに IT 基盤を活用した中心市街地活性化の施策の展開が必要である。

〈※注〉 岩見沢 IT ビジネス特区の特例措置である「空中線利得を増大した 5GHz 帯無線アクセスシステムの導入事業」等は 2005(平成 17)年度に全国展開されたことから、11 月 22 日付で特区の認定は取消しとなっている。

(参考・引用文献)

構造改革特別区域計画(平成 15 年 5 月)「岩見沢市 IT ビジネス特区」

岩見沢市中心市街地活性化基本計画(平成 15 年 6 月変更岩見沢市)

岩見沢市中心市街地商業活性化 TMO 構想(平成 15 年 3 月岩見沢商工会議所)